第9回 子ども・子育て支援全国研究大会 2018 in 埼玉

テーマ 伝承

～子どもたちへ
手渡したい未来～

報告書

日時 12月3日(月)・4日(火)

会場 ウェスタ川越 〒350-1124 埼玉県川越市新宿町1-17-17

主催 日本子ども子育て支援センター連絡協議会（日本子ども子育てネット）

主管 埼玉子ども子育て支援センター連絡協議会（埼玉ここネット）

後援 内閣府 厚生労働省 埼玉県 川越市 全国保育協議会 日本保育協会 全国私立保育園連盟

ここネット 日本子ども子育てネット　埼玉ここネット 日本子ども子育てネット

伝承

～子どもたちへ手渡したい未来～

大会主旨

本年度から、改定された新保育所保育指針・新教育保育要領のもとでの新しい保育と子ども・子育て支援が始まりました。

本年５月に東京目黒区で発生したような悲惨な虐待事件等の増加、７月の大水害等の近年の異常気象による自然災害、増える一方の子どもの貧困など、健全な育ちと子育てを取り巻く様々な情勢は厳しさを増しており、これらの社会環境の変化は心身の発育不全を始め、気になる子どもの増加など、子どもの育ちにも大きな影を落としています。これらのことから、今後ますます子ども・子育て支援に携わる子育て支援事業への期待が高まっていくものと思われます。

第９回大会は、「小江戸」（こえど）の別名を持つ歴史と伝統の町埼玉県川越市を会場に、日本古来の豊かな子育ての中で「今の私たちが無くしてしまった安心して子育てできる環境が子どもたちに何を与えてくれていたのか」「これからを生きる子どもたちに手渡したいこととはなんだろう」を一緒に紐解きながら、参加者相互の交流と子ども・子育て支援の質の向上を目指して「過去を未来の世代につなぐ架け橋」となるように皆で考え・思いを共有しあえる場となるよう研究大会を開催致します。

たいむてーぶる

日程 ＼ 時間	8 30 9 30 10 30 11 30 12 30 13 30 14 30 15 30 16 30 17 30 18 30 19 30 20
第1日 12月3日（月）	受付 / 開会式 / 行政説明 / 緊急企画！特別講演 / 休憩 / パネルディスカッション / 休憩 / 基調講演 / 休憩・移動 / 交流会 ウエスタ川越内多目的ホール
第2日 12月4日（火）	受付 / 分科会Ⅰ / 昼食 / 分科会Ⅱ / 休憩・移動 / 閉会式 / 特別企画 / 18:30 終了解散

新しい年を迎え　～子どもたちの未来のために～

12 月に埼玉県で第 9 回子ども・子育て支援全国研究大会を開催し、皆様のお力で実り多い大会となりました。皆様に埼玉ここねっとを代表して心から感謝申し上げます。

新しい年を迎え、子ども子育て支援センター連絡協議会が子育て支援の中心的な役割を果たすことがますます大きくなってきました。子どもたちを取り巻く社会的環境は益々厳しさを増しています。子育ては親子の関係の問題ではなくなり、社会的、経済的、地域的環境が大きな影響を与えており、このままでは日本の将来さえ危ぶまれるのではなかと危惧します。

天皇陛下が 12 月にお言葉を述べられました。戦後 70 年、戦争の惨禍に巻き込まれることなく平和な時代を過ごせたことへの感謝の言葉を聞いて、この言葉の持つ意味を改めてかみしめなければならないと思います。

年頭に当たり、子育てに関係する方々が、オリンピックや万国博覧会などに目を奪われ、私たちの目の前の子どもたちに寄り添うことが損なわれることがないよう祈念します。日本の将来を担う子どもたちのために！

埼玉ここネット会長　剣持浩

大会を終えて

この度は「第 9 回子ども・子育て支援全国研究大会 2018 in 埼玉」を、ここネットの皆様やご後援を賜りました各団体・行政の皆様方はじめ、埼玉のあらゆる分野の方々のお力添えをいただきながら無事開催できましたことを心より感謝申し上げます。

実際、二日間で学ぶにはもったいないほどの内容で、師走の多忙な時期にもかかわらずご講演いただいた諸先生方にもこの場をお借りして改めて御礼申し上げます。そして何より参加してくださった現場の皆様にとりまして収穫の多い研修でありましたらこんなに喜ばしいことはありません。

この大会を機に発足しました私たち「埼玉ここネット」は、これからも子育支援の学びをともに深めていくことを目的に活動していく所存でございます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

埼玉ここネット役員一同

第九回子ども・子育て支援全国研究大会
二〇一八 in 埼玉 が「子どもたちへ手渡したい未来」のテーマのもと、多彩なプログラムにより盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。

私は「希望にあふれ、誇りある日本」の実現に向けて全力を傾注いたしておりますが、将来を担う子どもたちの健全な育成は、教育の基盤を創るものであり、ひいては国づくりの基本となるものと考えており、皆様方の平素のご労苦、ご尽力に対して深甚なる敬意を表します。

結びに、本日の大会が実り多いものとなりますことをご期待いたしますとともに、日本子ども子育て支援センター連絡協議会の今後ますますのご発展と、木本会長様はじめ皆様方のさらなるご繁栄、ご健勝を祈念申し上げます。

自由民主党総裁　安倍晋三

会　場　　ウェスタ川越（埼玉県川越市新宿町１−１７−１７）
大ホール及び多目的室、市民活動・生涯学習施設
参加費　　会員 16,000 円／非会員 18,000 円
主　催　　日本子ども子育て支援センター連絡協議会（日本子ども子育てネット）
主　管　　埼玉子ども子育て支援センター連絡協議会（埼玉ここネット）
後　援　　内閣府　厚生労働省　埼玉県　川越市　全国保育協議会
日本保育協会　全国私立保育園連盟
大会参加者数　３９８名（参加申し込み数３７５名、ボランティアスタッフ２３名）

セッション一覧

セッション名	講座名	講師	会場	参加者数
BS研修	1　足ゆびを伸ばすひろのば体操と全身・かみ合わせの関係、口腔育成の（装置）の話 2　発育期　歯並び・かみ合わせ治療の実際 3　歯並びを治す治療、口腔を治す治療	山下剛史 関口一樹 小林高志	多目的室A	61
分科会1	未来の子どもたちの脳と心の発達を考える	明和政子	多目的室BCD	141
分科会2	歯科医師が教える０歳からの口腔育成講座	藤原康生	多目的室A	62
分科会3	ママである私が笑顔で生きる ～支援拠点事業が地域と家族に明るい笑顔を贈る～	堀　昌浩 山下真実	活動室１・２	102
分科会4	子どもをとりまく世界の「今」	山田眞理子	リハーサル室	67
ランチライブ	ああせんせいと遊ぼ！	菊地政隆	活動室３	39
分科会5	読む力が未来をひらく	脇　明子	活動室１・２	96
分科会6	保育所保育指針に見る保育の未来	浅井拓久也	多目的室A	74
分科会7	命をつなぐ・生活を営む力をつなぐ	榊原久子	リハーサル室	86
分科会8	現場で活かす！０・１・２歳児の未来を育む「３つのT」	髙木早智子	多目的室BCD	118

1日目

BS 研修（ビフォースタート研修）

日時：平成 30 年 12 月３日（月）10：00〜11：00　多目的室 A
演題：①足ゆびを伸ばすひろのば体操と全身・かみ合わせの関係、口腔育成の（装置）の話
　　②発育期　歯並び・かみ合わせ治療の実際　③歯並びを治す治療、口腔を治す治療
講師：山下剛史・関口一樹・小林高志
記録：高田美華（第二なでしこ保育園）伊藤千春（第二なでしこ保育園）

１．　足指を伸ばす「ひろのば体操」と全身・噛み合わせの関係、口腔育成 (装置) の話

山下　剛史氏

・足、指の正常な形とは・・・・指がまっすぐでしっかり開いている。
・外反母趾 (親指の変形)・・・・左右の足を合わせた時、両足の親指の間に人差し指１本入る。
・内反小指 (小指の変形)・・・・小指が内側に曲がった状態。５本指ソックスが良い。
・かがみ指・・・・・ブカブカの靴やスリッパを履くとなってしまう。

◎足や指が良くない状態だと、身体のゆがみに繋がる。
◎足指のばしの体操『１日５分のひろのば体操』を毎日やるようにする。(左右の足を２分３０秒)
※子どもの場合は、左右１０分に行う
◎ひろのば体操を毎日続けることが、咬合力やバランス能力を左右均等にしてくれる。
◎咬みあわせの乱れを改善する方法とは？
・前歯でかぶりつくことが大切。しっかり噛むこと。
・朝２０回の『ひろのば体操』
・夜間の食いしばりを利用した「口腔育成装置」を使用する。

２．　「発育期　歯並び　噛み合わせ治療の実際」

関口　一樹氏

アゴの発育はやはりとても重要！！
・現代人は、やわらかい物や砂糖がたくさん入ったものを食べることが増えた
・食生活と運動がうまくいっていない。
・しっかり噛まないと、アゴが前方向に発育せず、後ろに下がってしまう。
・アゴが正常に発育していかない＝口呼吸となる
※口呼吸になると、アトピー・アレルギー・睡眠時無呼吸症候群・インフルエンザ等にもかかりやすい。
・口呼吸の習慣が鼻炎も引き起こす。
・アゴの発育は８歳くらいまで。（だから、保育園では前歯でかぶりつく経験をたくさんさせる）
・哺乳類は基本口を閉じる必要があり、口を閉じていると集中力も高まり、力が出せる。
・アゴが小さく、噛むと下の前歯がかぶってしまう。このようなお子さんに１番有効な治療とは？
　※筋機能訓練＋マイオブレースを使って治療
・鼻呼吸の重要性

３．「歯並びを治す治療、口腔を治す治療」

小林　高志氏

・歯並びの良し悪しの岐路は、幼児期にある。
・乳歯の使われ方
　舌の使われ方
・遺伝要因もあるが、それ以上に環境要因も重要！！

☆口呼吸の重要性
・口が開いている・しっかり噛まない。→　ストレートネックの子どもの増加
・いい加減な歯の矯正をする歯科医も多いため、注意する。
　※チャイルデントの認定証をもつ歯科医のリストを参考に歯医者を選んで欲しい。

開会式

11:30 ~12:15

司会：山口あゆみ

【来賓】

川越市長	川合善明氏
参議院議員	有村治子氏
厚生労働省	田村　悟氏
全国私立保育園連盟	小林公正氏
日本保育協会	国重俊亮氏

【主催】

ここネット会長	木本宗雄
埼玉ここネット会長	剣持　浩
ここネット理事	小岱柴明
〃	村上千幸
〃	廣瀬集一
〃	中川浩一
〃	柳溪暁秀

オープニング：わらべうた
宇野由美子・大関友子
薗田律子・須賀園子
滝澤加奈子・藤沢弘枝
玉川晴美・平塚知佐

川越市長
参議院議員
厚生労働省
全国私立保育園連盟
日本保育協会

主催者挨拶
ここネット会長　木本宗雄

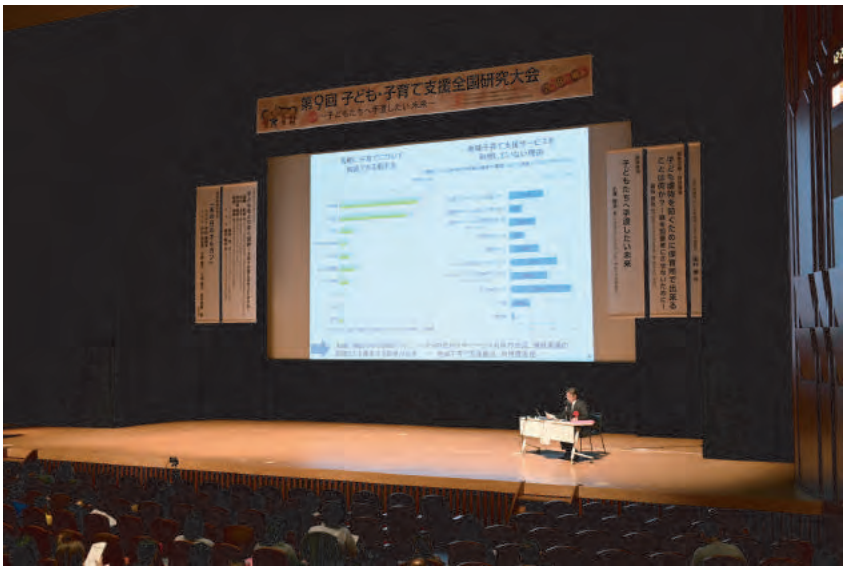
主催者挨拶
埼玉ここネット会長　剣持浩

来賓挨拶
川越市長　川合善明氏

来賓挨拶
参議院議員　有村治子氏

行政説明　12:15~12:45　『地域子育て支援拠点事業の役割と課題・今後の展望』

厚生労働省　子ども家庭局
子育て支援課　課長　田村悟氏



緊急企画！特別公演

12：45〜13：30　『子ども虐待を防ぐために保育所で出来ることは何か？
〜親を加害者にさせないために〜』

武庫川女子大学文学部
心理・福祉学科
教授　倉石哲也氏

緊急企画！特別公演

日時：平成 30 年 12 月３日（月）12：45〜13：15　大ホール
演題：子ども虐待を防ぐために保育所でできることは何か？〜親を加害者にさせないために〜
講師：武庫川女子大学文学部　心理・福祉学科　教授　倉石哲也氏
記録：河邉陽子（第三なでしこ保育園）

Ｈ３０の目黒区の結愛ちゃん事件とＨ２９箕面市の虐待死亡事件の大きな違い
箕面市の男児は保育所に入所し「見守り」の対応をしていたケースだった。にもかかわらずなぜ事件を防げなかったのか…

◎子ども虐待の現状
・虐待件数は増え続けている…実際の虐待件数はもっと多い。養育環境を把握する重要度が高まってきている。箕面市の事件は二日前に保育士が元気なことを確認している。そこで家庭訪問が行われずその二日後に亡くなってしまった。
・保育園内で元気な子でもおむつを変えるときなど身体に触れたときに、怯える・激しく泣くなどのサインがあったら虐待を疑う必要がある。
・親が辛い等育児不安を口にしたり認めている時は、軽度のことが多い。親が自覚がなく認めない時の方がハイリスクな虐待の傾向にある。

◎虐待されている子の保育所の利用に関する規定
・虐待が疑われる子どもを在宅で支援する場合、保育所等の児童福祉施設の積極的な利用が市町村の判断で行われるようになった。これにより虐待（疑い）を理由とした子どもの保育所の利用が法的に位置づけられたことになる。
・市町村は保育所にケースの照会・利用の意図・支援方法を示す必要がある。
　→実際には「入所します、よろしく」と丸投げのケースが多い。保育所入所したことにより虐待のフォローの重要度が下がる落とし穴…箕面市の事件はそこで起こってしまった事件
・保育所はケースの照会・支援方法等について市町村と積極的に共有する必要がある。
　保育所は市によくケースについて尋ねる必要がある。

◎気づき・発見の難しさ
◆連携と情報共有
・担当者の交代…これまでのケースの経過がわからない。特に公立は人事異動で起こりやすい。
・親の側につく支援者…情がわき親をかばおうとする。
◆子ども・保護者との信頼関係
・親和性…対立を回避
・親子分離への抵抗
※組織の中で常に議論していく…これでいいのか？支援者が緊張感を持っていると防げる。

◎親を加害者にさせない支援

◆「相談」…原則、市町村対応…支援ベース

・子どもや子育てに関する相談全般

・気になる子ども（親）の相談

・通告とは異なる。

◆「通告」…原則、児相と市町村の協動対応…介入ベース

・虐待が疑われる＝法的対応

・現認の必要性

・４８時間以内対応

◎通告について

・虐待通告は「ためらわない」が原則である。保護者との信頼関係が壊れることを躊躇する気持ちが働き、子どもが保護されることも心配。

・早期対応することで子どもの被害を最小限にできる。＝保護者を被害者にせずにすむ。

・園内で決定し、通告は園長等管理職の責任で行う。

・登園しなくなった時は保育所ばかりに負担がかからないように関係機関と役割の分担を明確にする。（入所した子の親は、入所の意味がわからず定時の登降園をしなかったり、不登園のなることがしばしばある）

◎保育者の親への目線

園の全ての保育者が保護者とコミュニケーションをとる。保護者の信頼感が広がる。

今こそ保育者の専門性を問い直すとき

・親への目線を問い直す…評価目線になっていないか？親の専門職化をさせていないか？（親はこうあるべき）。ポジティブトレランス…長期間話し合うことで親理解が進む。その上でルールを共有する。出来ないことを許す。「寛容力」が大切。

・保育者の立ち位置を問い直す…保育の代替え・補完＝親の代わりに子育てすることを任せてしまう。子どもの愛情を育てること（親との対立は愛着を阻害する）

◎保育・子育て支援で出来ること

◆愛着の回復

・子どもと親の回復を支える

・保育者は子ども、親、それぞれと波長をあわせる

◆情動の調整を促す

・否定的感情を受け止める

◆自己能力を高める

・承認の機会を増やす

自信を持った親支援が出来ているということは、適切な親理解が出来ている。

市町村と一緒になってジャッジしていく。

パネルディスカション

13：45〜16：30

『子どもをとりまく世界
〜子育ての蔵に何を入れますか〜』

コーディネーター
埼玉ここネット　剣持浩

助言者　倉石哲也氏

パネラー
東京大学大学院教育学研究科
教授　遠藤利彦氏

パネラー
参議院議員／
元少子化対策担当大臣／
初代女性活躍担当大臣
有村治子氏

パネラー
保育園を考える親の会代表／
保育ジャーナリスト
普光院亜紀氏

パネラー
埼玉県保育士会会長／
認定こども園こどものもり
副園長　若盛清美氏

パネルディスカッション

日時：平成 30 年 12 月 3 日（月）13：45〜16：30　大ホール
演題：子どもをとりまく世界　〜子育ての蔵に何を入れますか〜
コーディネーター：埼玉ここネット　会長　剣持浩
助言者：武庫川女子大学文学部　心理・福祉学科　教授　倉石哲也氏
パネラー：東京大学大学院教育学研究所　教授　遠藤利彦氏
：参議院議員　元少子化対策担当大臣　初代女性活躍担当大臣　有村治子氏
：保育園を考える親の会代表　保育ジャーナリスト　普光院亜紀氏
：埼玉県保育士会会長　認定こども園こどものもり副園長　若盛清美氏
記録：髙間道子（社会福祉法人童心会）

【コーディネーター　剣持浩氏】
・70 年前、終戦後に農村では次男三男が食べて行けずに上京し、都会で新興団地が建設され子どもが増え保育園がたくさん必要になった。若い労働者の受け入れのために、保護者のみでなく会社の社長が保育園づくりを求めた時代があった。しかし、現代はその街に孤独死の問題が出てくるように変わってきている。
・子ども達は、ニュースで伝えられている虐待死等の悲惨なケースがある時代になっている。次世代へつなぐための「伝承」と「子どもへ手渡す未来」について、みなさんと考えてみたい。
・川越は蔵の町。蔵はもみを貯蔵していくために重要なものであり、次年度につないでいくために、苦しくても大切にもみを残して命をつないでいくために使われてきた。子育ての蔵に何を残して行ったらよいか、様々な角度から考えていきたい。

【子育ち・子育ての基本について考える　〜アタッチメントと非認知的心の発達〜　遠藤利彦氏　】
・東京大学発達保育実践政策学センターでは、自治体の協力を得て全国でどんな実践をしているのかデータをまとめ研究している。
・子ども発達の研究のきっかけは、「ライナスの安心毛布」。子どもによって安心できるものがタオル、ハンカチなど一人一人違う。なぜこの違いがあるのかを、専門的に調べてみたいと思った。そこで、大人と子どもの関係をアタッチメントを切り口に研究している。
・アタッチ＝くっつく　「不安な時にくっつきたい」というあたりまえのことができない子がいる。アタッチメントの連続性・非連続性に関する 30 〜 40 年に亘る縦断研究、非定型的な養育環境に置かれた剥奪児、特定の早期介入をした場合の追跡など世界各国で縦断研究が報告されている。
・保育の影響力の研究、家庭の外での経験を豊かにすることで、子どもの育ちを支えていけるのではないかという研究がされている。
・ルーマニアの捨てられた子ども達の研究では、施設の中で物理的、生理的欲求は満たされて育っているにもかかわらず、子ども達に発達の遅れがみられた。怖くて泣いたときにすぐに抱いてもらえない、抱いてもらって温かいケアを受けられないという環境であった。これは深刻なアタッチメントの剥奪であり、心身全般のダメージが大きいことがわかった。

・「人から愛してもらえる、どんなに泣いても見捨てられず大切にしてもらえる」ということによって自分に価値があるということがわかるのであり、この気持ちを幼少期に身につけられないと人を信じることができなくなる。このような失敗をすると人生につまづきが多くなる、と世界の研究でわかってきている。
・ジェームズ・ヘックマンの研究により、乳幼児期に国や自治体が公的資金を教育投資することが、社会にとって最も効果的だということがわかった。これは、1960 年代にアメリカで開始された研究であり現在も継続している。
学校でどんなに教育しても、ブラックアウトしてしまう子がいるのは何故かということに着目して、3 歳から 2 年間幼稚園に通う子とそうでない子を比較して追跡すると、幼稚園に通った子は大人になっても経済的に安定して幸福度が高く、犯罪も少なかった。
何故このようになったのか、園では温かい感情をもって良識をもって関わってくれる大人がいたからである。家ではネグレクトに近い状態でも、園で愛情を持って関わってもらえたことでしっかりした土台がつくられた。人生の土台になる時期に、しっかりした土台がつくられることが大切であり、小学校以降その上に成果が積み上げられていく。
・土台の中で大切なものは、非認知能力と社会性である。「人を信じて愛してもらえて自分に価値がある」これを育むゆりかごとしてのアタッチメントが必要である。
あたりまえの中に人生の大切な土台がある。保育者としての専門性がここに求められる。

【日本のたからものをご一緒に守りましょう　　有村治子氏】
・オリンピック、パラリンピックが 2 年後に迫っている。その後の経済が落ちないようにするためにどうすべきかを、考えていかなくてはいけない。現在、保育への世間の関心は高いが、少子化に向かっている。今、その後のことを考えておかなければならない。
・英語教育やインターネットで保育を見られることをアピールしている保育園であっても、母乳の扱い方を知らないことに危機を感じて退園した経験がある。園の内容は様々で、「保活」をする母親への情報本が出るような時代になっている。保育について「目利き」になることが大切。
・保育園・認定こども園では、親を育てるキーステーションになることができると保育士の社会的地位が上がるのではないか。
・「かごめかごめ」や「なべなべそこぬけ」を諳んじられない親が多い。親から子への伝承が難しい時代、保育園・認定こども園が地域への伝承をするキーステーションになっていくことで、園に対する国民の意識を変えていくことができるのではないか。
・子育てでは、愛情を言葉で口に出して伝えていくこと、アタッチメントが大切。自身の経験でも保育園の先生のアドバイスで、1 日に 4 回ぎゅっと抱きしめ、「〇ちゃんはパパとママのたからもの」と声に出して伝えることができた。これらのことは科学的知見が発表される前から、保育士はやってきている。
・親が子どもにプレゼントできる最大の贈り物の一つは「習慣」ではないか。習慣が人生をつくる。命と人格を育むためにどんな習慣を伝えていけるか、それは大人が自ら自分を律することではないか。
・全国で保育士不足が深刻になっている。保育士の子どもが保育園に優先入園できて働くことができるよう、平成 29 年秋に全国市長会でこの陳情を伝えた。「全国統一でやってもらえるならば」と市長さん達に了解をもらえて実現できた。ほかの職業では優先入園は行われていないので反論がある

のではないかと予想していたが、社会に受け入れられて新聞各社の反対社説もなかった。そのように社会で、保育への理解が深まってきている。その後、30 年 4 月からは保育園で保育を支える看護師、栄養士等も優先入園が認められるようになってきた。
・保育をサービスというのはやめるようにしたい。教育はサービスとはいわない。「サービス」という言葉が、モンスターペアレントをつくることにつながっているのではないか。保育は「命と人格を育み、親を育て支援する尊い仕事」であり、サービスではない。このことをぜひ実現していきたい。

【子育てというステージ　　普光院亜紀氏】
・全国１００都市の保育力充実度チェックを毎年調査している。保育料無償化についてのアンケートは、マスコミでも取り上げられている。自治体でも、保育は行政の重点課題になっている。
・私自身の保育との出会いは、我が子が保育ママにお世話になっていた時。あらゆるサービスはお金で買うものと思っていたが、それは自分のおごりだと気づかされた。保育ママは親のためでなく、子どものためにと考えて愛情を注いでくれた。保育園に入園してからも、園ではサービスではなく子どものために愛情をかけて、楽しい生活をさせてもらっていた。親にとって子育ては人生が大きく変わるステージになる。
・ヒトは栄養だけでは育たない。下記のような研究からわかる。
ボウルビィの研究で、第二次世界大戦後、孤児院での子どもの死亡率が高かった。衛生的な環境で看護師も 10 対 1 で配置されていたが、感染症予防のためなるべく触れ合わないようにして育てていた。
『３０００万語の格差』（ダナ・サスキンド著、掛札逸美訳、高山静子解説）では、子どもへの言葉かけがどれだけ大切かが書かれている。人工内耳を入れても、ことばを習得できる子とできない子がいる。ポジティブな言葉かけをすると語彙数が増えることが分かった。
「ママたちが非常事態！？」（ＮＨＫスペシャル）では人間が次々に子どもを産めるように進化してきたのは、集団育児のＤＮＡを持っているから、とわかってきた。
我が子を幸せに育てたいと願っても、フラスコの中で純粋培養することはできない。大人が協力して社会をつくり出さなければならない。
・保育園を考える親の会に届く保護者の声から分類抽出すると、「保育所等の保護者支援の８つの力」がある。親の就労を助ける、子育てのノウハウの伝達・生活習慣の援助、子ども理解の援助、受容、成長の喜び・愛情への共感、子どもの育ちに必要な環境の提供、地域のつながりの支援、子育て支援についての情報共有、困難を抱える家庭への支援、であり保育者の役割は大きい。
・保育士とのたわいない会話が、子育ての救いになっていることを経験している。
・保護者は「保育の見える化」で子どもの様子を知ることができ、質の高い保育は質の高い保護者支援を実現する。園自身、保護者、地域社会、それぞれに対して「保育の見える化」を進めていってほしい。

【地域の子どもとして育てる　～蔵に入れて後世に残したいものは～　　若盛清美氏】
・子どもを幼稚園、保育園で分けることなく、一体として育てていきたいと考えていた。県からの勧めもあり、平成 13 年、幼稚園から認定こども園に移行した。
・松伏町は人口が 11 月現在、３万人を下回っている。平成２２年度以降減少に転じ、出生数は年２００人前後に減少している。

・孤立しがちな親子が多いが、地域の中で子育てをしていく環境づくりとして地域行事を行うようになりつながりが生まれている。大人になって「生まれ故郷が大好き」といわれる街づくりをおこない、伝統行事を伝えていきたい。
・自治体との協同によるネットワークづくりを進めている。アンケートを実施して見えてきた課題は、保護者支援、地域子育て支援、小学校との連携。
・子育て支援の課題は、地域の中で見守られながら子育てをおこなうことが難しいケースが増えていること、虐待や養育拒否だけでなく、子育ての身近な支援の必要性が高まっていること、子育て世帯に対して地域の中での関りや支援について考えていくことなどがあげられる。地域との連携を取りながら、開かれた園づくりを目指している。
・現在、保護者の園行事への参加は９９．９％となり、楽しんでいただいている。
・保育者と保護者の関係は「支援する人・される人」ではなく、保護者が保育士の姿を見て自然に学んでいくものと考えている。
・『こどものもり』は、保護者の子育てを応援していきます。と同時に、「地域の子どもとしてより一人一人の思いを大切に育んでいきます」

〇まとめ・おわりに
【倉石氏】
・成熟社会の矛盾として、保育制度が整うごとに保護者の力が育たなくなり、保育の無償化によって、保護者が園に頼りすぎてしまうようになるのではないかと感じる。
・保護者には保育に参加してもらい、一緒に食事やどろんこあそびなどをしてもらうことが、「保育の見える化」以上に必要ではないか。親の保育参加を求めていくことが、大事になってくると思われる。

【剣持氏】
・子ども達が食べたいときに食べられない、寝たいときに眠れない、動きたいのに動けない、これが虐待を受けている子達。人間が生きていくうえで大切なことは、食べること、寝ること、動くこと、これに加えて人とつながることが極めて重要ではないか。

【遠藤氏】
・「保育はサービスではない」という有村先生の話が印象的。重要な仕事であり、自信をもっていただきたい。保護者の力を育てること、地域を活性化することが重要。

【若盛氏】
・後世に残したいことは、地域の交流サロンが子育て支援としてではなく地域にしっかり根付いていくことではないか。

【有村氏】
・これまで、マタニティーマークの全国統一や保育士の子どもを優先入園できるようにと関係機関に働きかけて実現させてきた。今後は、１５０人まで調理師２人でおこなうという厳しい状況にある調理師の処遇改善をおこなっていきたい。

基調講演　16：30～18：00　『子どもたちへ手渡したい未来』

小澤昔ばなし研究所所長
筑波大学　名誉教授
小澤俊夫氏

基調講演

日時：平成 30 年 12 月 3 日（月）16：45〜18：00　大ホール
演題：子どもたちへ手渡したい未来
講師：小澤昔ばなし研究所所長　筑波大学名誉教授　小澤俊夫氏
記録：河野律子（日本女子大学）

◎昔話はどこにあるのか？絵本の中？本の中？
　　→いいえ、昔話は語られている時間の間にだけあります。
　　本を読むということは、読み返すこともできる、立ち止まることもできる。
　　しかし、昔話は、語られている間だけで、戻すことができない。

昔話は時間的文芸である（音楽も同じ）
語り手はわかりやすいように語る　・細かい描写をしない　・写実的な語りをしない
　　・極めてシンプルにクリアに語る
出版されている昔話…創作が多い、細かい説明が多い
昔話には文法があるので、それを守ってほしい　→　シンプルでクリアな文体

【語り】例　「やまんば」の話（小林おばあちゃん）
・結末句…(これでお話はおしまいという意味）昔話は嘘の世界なのでこれでおしまいという意味
　地方によっていろいろある
・主人公や登場人物、重要なものを孤立的に語る (1 人、1 つ)
　昔話の場面は、常に 1 対 1(孤立と孤立) の場面で構成される　→　一番シンプル
　(うまかた：やまんば)…うまかたの姿、やまんばの姿を想像する→1 人だから想像できた
　他に、浦島太郎・白雪姫 (7 人の小人も単位としては 1) などもそうである
　言葉で耳に入ってきたことを絵に変換する力が必要　→　1 対 1 対応がよい
・昔話は残酷ではあるが、残虐には語らない
　馬は (足をぶった切っている) なぜ、3 本足、2 本足でも走れたか？
　苦しんでもいない、血は流れてはいない、馬の形がくずれていない、そのまま走れる
　形がないから　→　切り紙細工のよう、図形のように語る
・昔話の平面性…平面的に語る・図形のように語る
　Q. なぜ残酷な場面があるのか？　→　主人公が話のゴールでハッピーエンドに至る途中の試練
　としてつかう。しかし、決して残虐には、リアルには語らない
・昔話は抽象的な文学で、写実的文学ではない。おとぎ話は抽象的な文学。

【語り】例　小話「どうもとこうもの話」
　　語法、語り方、昔話としては百点満点（血も流れない、孤立的（1 対 1)、平面的）
　　このように昔話の語り口自体が重要文化財…昔話を大事にしよう！
　　(紹介) 語り口についての本「こんにちは、むかしばなし」

・昔話は同じ場面は必ず同じ言葉で語る（世界中の昔話が一緒）
〇わかりやすい
〇子どもは「もう知っているもの」と出会いたがっている
音楽も一緒…同じメロデイが必ず出てくる→人間は皆また出会いたがっている
魂の安定、安らぎをもたらすもの…同じものに出会う喜び、３回目の重要性

◎昔話は何を語っているのか
1．人が成長する姿　　2．人間と自然　　3．命とは何か
〈子どもの成長〉
・例「わらしべ長者」 福島
　子どもは自分が獲得して持っているものとちょうど合致するものに出会った時に次の段階を有効に進むことができる　→　子どもの成長そのもの
※大人がやるべきことは、子どもがどの段階かを見極めること（大人の責任）
※子どものペースでやること (ゆっくりがいい)
・例「シンデレラ」グリム童話　26 番「はいかぶり」 →思春期の子どもと同じ
若者は振り子のように揺れる→昔話は子どもの成長する姿を語ってくれる
・例「クリスマスツリー（もみの木)」を育てる
生きているものはみんな自分はこういうかたちでありたいという内的意志を持っている（形式意志）
人間の子ども達もみんな普通に生きていこうと思っているのではないか (障害児も同じ)
大人はそれを助けることが大事

大人が子どもに最終的に、そして根本的にしてやれることは？
◎３つの自覚（思春期の間、成人する前に）が持てるように支えてやること
・自分が愛されているという自覚　・自分が評価されている自覚　・自分の価値が認めらている自覚
隣りの子と比較しない　(自分は自分なりに評価されている、愛されている)
おはなしを自分の声できかせてあげてください！目を見て！ (絵本の良さ、おはなしの良さ)
自分の身近にいる大人の肉声…体温や声の調子、ぬくもりを感じられること
懐かしい思い出とともにある…囲炉裏の薪の臭い、暗さ、表情などと一緒に覚えている (深いつながり)
人間のつながり　…口伝えは単にお話を伝えるのではない、一人の人間の付き合い
自分の声を使って子どもたちの耳におはなしを届けて　一生思い出せるようなおはなしを届けて
声は永遠に心に残るもの…叱る・禁ずる・命ずるために使うのではもったいない
子どもにしてみれば、今日一日の出来事は人生を語っている
→声で返事をして、ちゃんと聞いてやってください
子ども達は自分が話していることを、先生や親にちゃんと聞いてもらいたいと思っている
皆さんの声が子どもたちの心の中に必ず、これから先も永遠に、ずっと残っていく
どうぞおはなしをたくさん聞かせてあげて、(話を) たくさん聞いてあげてください

　子どもたちが大人になった時、今のような平和な日本を送ってやることは大人の責任
子ども達に平和をおくってやること　　その為にどうしたら良いか考えることをお願いします

交流会

18：30〜20：30

ウェスタ川越　多目的室 BCD
参加費 7,000 円／参加人数２００名

歓迎の挨拶
ここネット
副会長　川副孝夫

川副副会長の挨拶の中で
「つながろう！」

和やかに始まりました

来賓挨拶
埼玉県議会議員
議長　斎藤正明氏

来賓挨拶
参議院議員　有村治子氏

来賓挨拶
全国私立保育園連盟
会長　小林公正氏

ご臨席賜った講師の皆様のご紹介

乾杯の挨拶
保育推進連盟
会長　大島和彦氏

お食事

マリア・セレン氏

第9回子ども・子育て支援全国研究大会 2018 in 埼玉　交流会

第9回子ども・子育て支援全国研究大会 2018 in 埼玉

マリア・セレン氏
CD 販売

次回開催県
山梨によるご案内

〆の挨拶
ここネット理事　柳溪暁秀

交流会

日時：２０１８年１２月３日　１８：３０～２０：３０
会場：多目的ホール BCD
参加者：２００余名
開会の言葉：川副　孝夫氏（千葉県子育て支援事業担当者会議事務局長　風の谷こども園
日本子ども子育て支援センター連絡協議会副会長）

歓迎の挨拶：齋藤　正明氏（埼玉県県議会議員議長）
埼玉県は人口７３０万。会場場所の川越は、江戸時代に川を通じて江戸と物資の交流が盛んだったことで「小江戸」と呼ばれた。この歴史ある川越を開催地として選んだ。物質の豊かさだけでなく、心の豊かさや３つの間である「時間・空間・仲間」を取り戻してほしい。
各地域で子ども＝宝を育て、守ってほしい。

来賓の挨拶：有村　治子氏
参議院議員
元少子化対策担当大臣
初代女性活躍担当大臣
シンポジュウムで言えなかったこと
保育の質の向上のためにさらにスキルを磨いてほしい。保育事業は社会的に信用があり地位も確立している。また、保育事業はものを上げ下ろしするようなものではない。「保育はサービス」という呼び名（言葉）を変えていく。

来賓の挨拶：小林　公正氏（全国私立保育園連盟会長）

乾杯：大島　和彦氏（保育推進連盟副会長）

１９：００～４０　ゲスト：オペラ　マリアセレン氏
2015 年デビュー。ソプラノとテノールの声を使い分けるダイナミックで非凡な才能に、各方面から注目を集め、性を超えた謎の歌の精として、新作オペラや単独コンサートの他テレビ･ラジオ･CM・企業イベント等に出演。

１９：４０　アトラクション『十人十彩』
１テーブル毎２チームに分かれて、埼玉県にかかわる問題をチームで答えるアトラクション。全国から参加した仲間が知恵を出し合い、全問正解したのは１チームで、チーム代表者は北海道の方でした。参加者全員がプレゼントをいただきご満悦。シール交換も始まってさらに盛り上がりました。シール３枚集めて、全国のお土産の中から好きなお菓子をゲット。埼玉の銘酒もドリンクコーナーにお目見えし、和気合い合いのひとときでした。

２０：１５　次年度開催県紹介度全国大会　山梨県からアピール
第１０回子ども・子育て支援研究大会 2019in 山梨　日時　2019 年 11 月 28,29 日
連帯からはじまる子育てプラットフォームづくり（仮テーマ）

大締め：柳渓　暁秀氏
富山県日本子ども子育て支援センター連絡協議会会長

日時：平成 30 年 12 月 4 日（火）　多目的室 BCD
演題：未来の子どもたちの脳と心の発達を考える
講師：京都大学大学院教育学研究科　教授　明和政子氏
進行：大崎幸恵（NPO 法人子育てネットくまがや）　記録：大関友子（なでしこ保育園）
タイムキーパー：井上美智子（ことぶき花の木保育園）　機材：木村和孝（ふらっと保育園）

〜ご自身について〜
ヒトとは何か？こころの進化をさぐるために今、地球上に存在するヒトの祖先であるチンパンジーの生態研究をするため 20 歳から 2 年間ギニアへわたりチンパンジーと共に過ごす生活環境に身をおく。その中で自身が研ぎ澄まされた身体感覚、環境の中に適応していく体験をし、人間も動物なのだ！と自ら実感したという　大学を退職したのちにはアフリカで生活しようと決めている

○人間とは何か？
　ヒトの行動と心理にまつわる謎
　ヒトとは？ヒトに特有の心のはたらきとは

・赤ちゃんラボ
まだ言葉で自分の心を表現できない段階の赤ちゃんのこころや脳を知ることで赤ちゃんのみている世界が記録できる機械を用いて研究
環境の中で最も重要な役割⇒親にほかならない！　脳や心は環境と身体は適応しながら発達していくので親子セットで検証することが大切
従来の乳幼児健診等主観的に評価することに加えてモーションキャプチャー（からだの動きを可視化するシステム）を使うことで親の状態、子の状態を客観的に評価することができたら親のストレスや問題を早急にキャッチでき隠れ虐待防止につながるのではないか
学問は人類の幸福のためにある！最先端の知見を現場で使ってもらうことが目標！！

・ヒト、チンパンジー、ニホンザル共通の祖先として生きてきた
類似性⇒両種が共通の動物時代にすでに獲得されてきたものと推測される
差異⇒それぞれが生きた環境に適応して独自に獲得したものと推測される
ヒトは進化の最高傑作、ヒトは特別⇒人間中心の考え方
それぞれの動物はそれぞれが生きてきた環境にふさわしい心を獲得していった⇒優劣は無い！
優劣ではなくそれぞれの特性であり　そもそもが違う！ということ

では、ヒトって？
1 つの情報に深く意味をとらえようとする性質がある
他人のこころに敏感で深く理解しようとする特性はヒトの環境においては重要

・ヒト (1 歳の赤ちゃん）とチンパンジーの違いについての比較実験結果でわかったこと
＜実験＞　ヒトが飲みものを注ぐ行為を見せる
　　ヒト⇒顔をみている　　チンパンジー⇒行為を見ている
自閉症の子どもは、チンパンジーと同様行為をみている
つまり、見ている世界が違うということ→特性としてとらえる

○他者の心を理解する２大神経ネットワーク
・ミラーニューロンシステム　見て理解出来る行為＝自分ができる行為
自分ができる行為　＝理解出来る行為
⇒つまり鏡 (ミラーニューロン）
自分と相手の心の状態の違いを区別する必要がない

・メンタライジング　抑制 / 推論 (TPJ: 側頭部頂接合部）　自分と他人の心が違う独立したもの
相手の立場にたって何が必要かをイメージできること
視点変換という機能⇒瞬時に自分のみている世界を相手のみている世界（心）に変換できる
適切な行為選択を選択したり状況の推測ができる⇒ヒトだけが特有に持っている脳の心のはたらき
チンパンジーにはこの機能がなく又、自閉症の方も苦手とすることが多い脳のはたらき
協力、教育、支援するという行動もヒトのみに見られる行為
ヒト＝教え、教え合う　効率の良い文化の伝承が可能になり獲得まで短い時間で身に付く

チンパンジー＝自分で試行しながら物の関係性を身に付けていくがために何年もの時間がかかる

○親になるとは・・・子どもの心をどう理解して子どもにどう接したらいいか
母性、父性は無い！親として働く脳を形作るのは養育形態
＜実験＞
①主に育児を担当している母親グループ⇒赤ちゃんが泣くとまずミラーニューロンシステムが働く
②父親グループ⇒時間経過と共にメンタライジングが働く　時間のギャップが生じる
③父親が日々育児を担当しているグループ⇒①グループと同じ脳のはたらきを示した
＜実験結果より考察＞
生物学的な性差が無い　経験が親としてどうふるまうか脳の働きを形作る
母性父性を超えて“親性”と科学者は呼んでいる

育児⇒前頭葉を使う知的な営み　ルーティンワークではない
研究の結果、育休後の仕事のパフォーマンス効率性が上がっているというデータも出てきている

○人間らしいこころはいつどのように生まれるか？
①発達はでこぼこしながら進む
発達障害の問題…先進国全体に加速度的に増加傾向にある
文部科学省⇒中枢性の生まれつきの障害と提唱しているが・・・
科学者的には⇒経験がもたらす発達障害的なキョウゲン系の増加によるものと推測

では、急増の要因とは何だろう？

・発達障害という概念が社会的に認知され、様々なラベルがついて診断されやすくなった

・母親の高齢化

・半分くらいは理由が不透明⇒環境問題が影響しているのでは？

人間の発達は非常に多様である

脳発達にはこの「感受性期」を逃さない多様性に見合ったオーダーメード型発達支援がこれからは重要

発達の多様性が生まれる重要な要因は感受性期

脳の感受性期とは？脳の発達において環境の影響を受けやすい特別の限られた時期

この時期にどういった環境にさらされるかによって遺伝子の発現が非常に影響される

生後８ヵ月ご過剰形成が「刈り込み」に向かう

第２次　思春期～２５歳　生物学的知見では人間の脳が成熟するのは２５歳以上

生物としての事実を知ったうえで社会的な (選挙権や少年法等) ものを考えるべき

政策決定をするうえで脳科学者がそこに居ないのが今の日本の現状

第二次成長期＝思春期　大脳の辺縁系が急激に発達

それにより自分の意識では抑制できない感情が活性化

この活動を抑制する働きが前頭前野 (メンタライジング) 思春期はこれが未完成で辺縁系の方が優位

このミスマッチにより思春期にさまざまな問題が起こる

（良い点）　先々を考えない、恐れを知らない＝リスクを恐れず新しい世界にとびこみたい特性

気持ちこころが人類の進化を支えてきた！

思春期の支援として＝前頭前野の役割を周囲の大人がサポートすることが大事

一緒に相手の心をイメージする機会を豊かに提供する

精神疾患 (統合失調症、ひきこもり、うつ病) の７８％はこの思春期に発症する

大人にならなくてはならない社会的なプレッシャーがかかっているのが現状としてある

○ヒトは胎内ですでに学習する存在である

胎児はお母さんと他の人との声を区別している

心拍を高め、お母さんの声に反応して口をあけ応答する＝原始的なコミュニケーション始まっている

経験フェーズ

＜実験＞

①　　聴覚―触覚経験（大人が赤ちゃんの体をくすぐりながら実験）

②　　聴覚のみ経験（大人が赤ちゃんの体を触れずに実験）

＜実験結果＞くすぐりを伴って聞いた単語に対してより強い脳活動がみられた

＊ＮＩＣＵで育った児の発達予後

神経学的な疾患をおうリスクが高い

妊娠週数２８週未満と、出生時体重１０００グラム未満でうまれた赤ちゃんにリスク高
疳高い声で泣く特性がある
早産のベビーは副交感神経 (リラックス) のゆらぎが小さく常に緊張状態な脳状態にある
早産児は満期産に比べ人の目、顔を見ない子が多い　幾何学図形の方をよく見る特性がある
支援として自律神経を整えてあげることが大事

脳の感受性期を見逃さずにタイミングよく適切な発達支援をすることが何より大切！！

【午前９：30〜11：30】

分科会２

日時：平成 30 年 12 月４日（火）　多目的室Ａ
演題：「歯科医師が教える０歳から始める口腔育成講座」
　　〜子どもたちの輝かしい未来のために今知っておくべき食育３つのポイント〜
講師：生田歯科医院副院長　保育士（チャイルデント）　藤原康生氏
進行：髙田綾（ことぶきイーサイト保育園）　記録：矢田喜美枝（第三なでしこ保育園）
タイムキーパー：栗原直美（第三なでしこ保育園）　機材：田仲雄貴（桃花保育園）

◎歯科医師が教える０歳から始める給食の先生・保育士の先生が知っておくべき食育３つのポイント
・健康長寿と寝たきりはどこで決まってしまうのか？
・老人と子どもの問題は同じ→食べてくれない。偏食・食べるのに時間がかかる。
・歯並びは小学生で決まってしまう。そこからどうにかするのでは遅い。乳幼児の頃からきっちり対処しなければいけない。
◎歯並びを良くするのは、幼少期のアプローチが大切
・正しく食べることを教える。
◎今子ども対になにが起こっている？
・握力の低下　不器用　⇒歯並びの影響
・幼い身体が老化している
・子どもに起こっている関節・筋力の低下は高齢者の特徴　⇒ロコモティブシンドローム
・口が開いている子は鼻呼吸できない　　口呼吸している子どもは無呼吸になる危険が大
・横向きは下がうえに上がろうとする力を衰えさせてしまう。→根本的対処にならない上向きが良い
・自閉症が増えている⇒10 年で３倍になってるが、→０・１・２歳までのアプローチで減っていく
◎子どもの視力が低下しているのはなぜ？・スマホがないところで低下している。なぜか？
・目の悪い子は良く噛んでいないことも影響している。噛む筋肉と目の筋肉は繋がっているから
・なぜ熱中症になるのか⇒口の中が関係している。熱中症を歯科医師の観点から考えると・・・
・上あごが成長していないと口呼吸になる。口呼吸になると脳を冷やすことができない
◎小学生の２０パーセントが便秘⇒便秘と噛むこととは関係があるのか？
・原因は上あごの成長不足と考えられる。
・人間の成長過程は⇒頭→首→肩→ひじ→手首→指関節（人間は上から下に成長していく）
・頭部の成長が良いとスムーズになり、バランスの良い体になる。
・子どもの成長には栄養と運動が大切→今までの食育は栄養中心
↓
・日本人の栄養知識は世界最高レベルだが、運動が抜けている
・アレルギー 4200 万人、また糖尿病も増えている
・酸素を取り入れることが大切⇒すべての病気は酸素不足考えられる
・こどもにはしっかり噛める物　　「食生活と体の変化」
・幼少期に伝統食を食べていたか
・やわらかい輸入食を食べていたかどうか？しっかり噛むと虫歯にならない。昔のひとは歯磨きをしない

◎顔を見ると健康かどうかが分かる

・顔は遺伝だけでなく生活習慣で変わる。前に成長するか、下に成長するか前歯でしっかり噛んでいたか？

8 割が 6 歳までに完成

・身体は 20 歳までに完成

◎子どもの食事で困っている事

・朝食べられ⇒夜ごはんが遅いとそのまま寝てしまうので、食べ物が残っているから 3 時間まえには食べないことが大切

・胃の働きは空腹感が大切⇒ぜん動運動になり消化、便秘解消につながる

・こどもは心臓が成熟しておらず、末梢まで血流が十分に血液が回らず手足が冷たいが心配はない

↓

マズロー欲求 5 段階

人間の欲求は下位の欲求が満たされると上位の欲求へ上がっていく

【講演を通して明確になったことや課題】

1　前歯で噛める様食材を大きくする　　前歯がぶりが大切

2　足を床につけるか正座で食べる⇒食べる時に足をつくと交互力がつく　正座で食べるのもよい

3　歯ごたえのある食材を食べ食後に水を飲むことが大切

・前歯でかむことが必要　手掴みで引きちぎる効果大⇒前歯で食べると前頭前野を刺激する

・この時期に覚えて高齢になっても影響する。

・30 回噛みなさいではなく噛まないと飲み込めない食材を提供

・保育士給食職員は一緒にたべることが必要⇒子どもは真似をして学ぶ

・自分で食べる機会を失わないように自分で食べられる物を準備することが求められる

・まずスプーンを下唇に触れさせる⇒上唇がとじるのを待ちます⇒スプーンを上唇と下唇ではさんだらまっすぐ引き抜きます。

【講師からの提言】

・心配な人はチャイルデントと呼ばれる医師に相談してほしい

【参加者からの声】

・日本のような先進国で栄養が足りているのに健康に問題が生じている事実が衝撃的だった。

・身体はすべて噛むことと繋がっているという言葉が心に残った

・分かりやすい話し方で、医師の立場から自分の子育てで実践しているお話しでとても分かりやすかった

・子ども達の未来のために大人が取り組んでいくべき課題と考える

【午前９：30〜11：30】

分科会３

日時：平成 30 年 12 月４日（火）　活動室１・２
演題：ママである私が笑顔で生きる。〜支援拠点事業が地域と家族に明るい笑顔を贈る〜
講師：（社福）鐘の鳴る丘友の会認定こども園さくら園長　堀　昌浩氏
　　（株）こころく代表取締役　山下真実氏
進行：薗田律子（第三なでしこ保育園）　記録：須賀園子（なでしこ保育園）
タイムキーパー：渡辺真理子（熊谷きらきら）　機材：尾畑真（汽車ぽっぽ保育園）

堀氏より
（1）　前日、パネルディスカッションで講演された遠藤利彦氏のアタッチメント
非認知的能力について
（例題）１　魚を頭に思い浮かべてみましょう〜どちらを向いていますか？　右？左？
　　２　赤いという色のイメージ何を思い浮かべますか？リンゴ、炎、スポーツカー？
1.2 両方共に、人が思い浮かべる、想像する、非認知能力は幼少の頃からの経験であったり周囲の大人の力も借りて人それぞれに蓄積されてできたものである。子どもに携わる大人や私たち保育士も支援センターで子供たちにそんな能力を援助している。

（2）妊産婦の死因第１位は自殺
＜東京 23 区で 2005 年から 10 年間に自殺で亡くなった妊産婦は計 63 人＞
産後２週から１年の間に産後うつに近い状況になった人 77 パーセント
「闇の時期」産後うつ発病リスク期間と言われる産後２週から半年の時期に母親への継続的なケアがほとんどない。継続的な公的サービスがほとんどない。
母親たちは「野に放り出されたような孤独感」を感じている。
石川県マイ保育園制度について
母親たちの育児負担感、不安感の高まりを受け地域の保育園に行って保育士への育児相談等を通じて育児不安の解消を図ることができる。園は子育て家庭への育児支援を行う。
更に公的には店でレジ優先であったり、ディスカウントや消費税分考慮されたりと優遇されるこの制度に､当初１年目は大反響であった。しかし､2 年目からは利用が下り方向で園に行く利用数も減ってきてしまった。
そんな状況をうけて母親の気持ちって？どんなところにハードルがあるのか？どんなことを求めているのか？制度の内容の他に見直しを検討してみたり母親に何かできないだろうか？母親をケアしていく必要性を改めて感じたのである。
山下氏と出会い、子どもを預けて母が女性になる時間「母子分離」が必要なのではないか？
こころくを参考に実施を自園でも行うことにした。
当初は園の保育士達に、どうして母親と子どもをわける必要があるのかその考えを受け入れてもらえなかった。しかし、実践してもうすぐ１年たつが「この日１日で１ヵ月もちます」という母親の声がある。預けるにあたりわが子に申し訳なさそうにしている母親もいて様々だが預けた前後の母親の表情が全く違うことを園の保育士が感じとった。
福祉の場所で実施してあげると声を上げることのできない人も参加できると考えている。

○実施内容はさくら保育園の支援センター内で行い、時にはスポーツジムのロビーやホテルなど場所がかわることもある。毎週木曜日・少人数での実施をしている。
なお申し込みは先生達の負担を考えネット会社に任せているため保育士は確認のみ行えばよいことになっている。

地域でこんなサービスを行うにはまず状況を知る、考えることが必要になる。
①　人材はどうだろう？園長、保育士、保育経験者　②　保育関係資源は？子育て経験者、既婚者、未婚者、中高生、子育て関係Ｎｐｏ、ママ友ネットワーク　③　地域資源は？地元企業、商店街 / 店舗、農家、老人会　④　その地域を愛する・気になる人（3rdpeople）

山下氏より
日々子どもと向き合う母親に「心、かるく、あかるく、まあるく」なってもらいたい。手をちょっと休めて自分のこと、子育てのことを見つめなおす時間が必要である。知人が出産した時、支援センターで子どもに対しての愚痴を言い合うことに、それはちょっとおかしいことではないか？母親達の普段の環境が影響しているのではないか？と感じた。子育てというのは未来へ１歩１歩子どもを育てることであり、未来へ繋いでいることだと私は認識していた。そのため母親たちのストレスを減らし、リフレッシュできる充実した時間が必要だと考えた。母親たちにランチやレッスン、エステなど充実した時間を過ごしてもらい、子どもたちもすぐそばで託児をして共に充実した時間を過ごすサポートをする母親のためのおでかけプラットフォームこころくを 2013 年にたちあげた。
《こころくでの活動内容》
少しの間、母親の抱っこを代わってあげる人を～だっこママ～と呼び、人材を募り、だっこママサークルの育成や地域企業と SNS 等を活用する。現在は東京、大阪、仙台等で展開しており勿論地域にあったスタイルや内容はそれぞれに違ってくる。
そこで、同じように自園もしくは地域で展開していくにはどんなことが必要でどんな人がそこを利用したいか具体的に数名のグループになってポストイットと表を利用して皆で討議してみることにしましょう。

抱っこを代わる「人」	抱っこを代わる「空間」	お母さん方でこのシステムを利用したい人
	子育てを支援したい企業（店舗）	
情報発信方法（媒体・メディア）		利用者管理（システム・体制）

～ポストイットに各々テーマに合わせた内容を書き込んで順番に貼っていく～

【講演を通して明確になったことや課題】
妊婦期から子育て期にわたる「切れ目ない」支援の重要性、環境が変わる母親たちにとって産後のケアはとても大切なものである。支援センターが核になり地域と母親を繋ぐことや、更には新たなにぎわいのある地域・子育て支援の地方創生を考えることが必要だ。
母親たちをサポートするにはどうしたらよいのか？
ひとつに母親たちに代わる 「だっこママ」の活躍もサービスとして存在する。
更には栃木市地方創生版こころく『街ぐるみ子育て Day』モデルにもあるように、①支援センターでの一時預かり実施・②地元企業・施設の一時預かりスペースの提供による子育て支援の見える化③市役所、公的機関の会いに行く支援④地元の子育て支援団体の情報発信による届けに行く支援⑤参加店舗の飲食サービス等の提供による街をあげての支援が、全国各地域の今後の課題になってくることだろう。会いに行く支援では、子ども連れの親子を待っているのではなく駅前や商店街等、こちらから外に出て行き子どもをもつ親の表情や様子を感じ何かしらの支援のサポートができることに繋がる。

【講師からの提言】
だっこをしてもらえる（だっこママ）等の問題など狭く考えてしまうと実現しにくいので大きく取り上げてみると支援の手は差し伸べられるはずである。今日提案した母親をサポートする事業も社会福祉充実計画にあてはめている。そういうことも認められる時代にこれから入ってくると考えられる。

【参加者からの声】
今日の講演有難うございました。数名の質問は自園で実践してみたいと思ってはいますが利用、管理システムをどうしたらよいか？支援センタースタッフでは、とても難しいので、どう起こしていったらよいかわからない。だっこを代わるひとの処遇はどうなっていますか？などの具体的な実践にむけての質問がほとんどであった。
実現には難しいことも多々あるができないことではない。講師の先生方のお話を伺い提案していただいたことで、支援センターが現在の育児や母親について改めて考える機会を作れたようだ。支援拠点が地域に明るい笑顔を送れるよう、しっかりと母親と向き合い課題に取り組み解決できるようにしていかなくてはならない。

【午前９：30〜11：30】

分科会４

日時：平成 30 年 12 月４日（火）　リハーサル室
演題：子どもをとりまく世界の「今」
講師：NPO 法人子どもとメディア　代表理事　山田眞理子氏
進行：甲斐恵美（風の丘こども園）　記録：滝本真理子（おおしか保育園）
タイムキーパー：山津郁美（三丁目すまいる保育園）　機材：板橋秀憲（てんじん保育園）

「子どもの発達へのメディアの影響」
☆乳幼児の発達とメディア
　乳幼児期の発達には何が必要かを基盤に、メディアの影響を考える。
①子どもの身体・感覚器の発達の視点　②親子の愛着関係の視点
ここで問題とするのは、乳幼児でも触れることの出来るテレビ・ビデオ・ＤＶＤ・タブレット・スマホ・ゲーム等の電子映像メディアである。メディアはあくまでもツール（道具）であり、それ自体が悪い訳ではない。ただし、乳幼児にとって悪い影響を与え、発達を奪う危険性があることを知る必要がある。
今と昔、テレビや電話は家庭に１台であったが、多数、個人持ちの時代となっている。
スマホは小さなパソコンであり、手軽さから思わぬ乳幼児への接触が増えている。「ポケモンＧＯ」の映像の刺激・「鬼から電話」は子どもに不用意な不安を持たせる危険性があり、９歳以上からでないと使ってはいけないと書いてある。また、全国で同じテレビを観ていた子どもがけいれん・発作をおこしたポケモンの同じシーンは、赤青の光・点滅刺激があった。日本はこれらに対する基準がなくこの事件をきっかけに基準が出来た。テロップが流れ、部屋を明るくして画面から離れて
観ましょう・・・とあるが、これは、基準スレスレを放送しているという危険性を知り、あくまで選ぶのは親。子どもを守っていないテロップが流れる番組には気を付けなければならない。
☆どうせＩＴに触れるのだからの罠
　ＩＴ社会の時代、どうせこれからＩＴに触れるのだから早いほうがいいというのは大間違いである。どうせいつか酒を飲むのだから、幼いうちから飲ませておいた方がいいと考える人はいないと同じで、低年齢児から触れている子どもの方が、メディア依存になる危険性が高いのだという。
日々、保育園で過ごしている子どもたちのなかでこんな子はいないだろうか？
・落ち着けない（多動）、イライラしている　・表情が乏しい、反応が希薄　・視線があわない
・言葉が出ない　・人をたたく、蹴る　・戦いごっこ以外のごっこ遊びをしない　・親のスマホを求める　・テレビ番組やキャラクターの話をしたがる
このような気になる子たちは、メディアから強い刺激を受け悪影響を受けている可能性が高い。
☆背景にあるもの
　１９８０年代、日本の子育て文化は激変した。
・おんぶがなくなり、母の背中でつける力、背筋力・則筋力・腕力・首の力・胸の力・歯茎の力等、上半身の力をつけることで、はいはいに繋がり、しゃべる、噛むに繋がっていくのだが、
１０、１１か月で早く歩いてしまう子は上半身の筋力が弱く、体の発達不全をかかえている。
・ビデオが一般家庭に普及し、テレビはその時間にならないと始まらないので待って観た満足感が得られる。ビデオはいつでも何回でも観られるので、待つことにストレスを感じる。

・車での移動が日常になり、夜寝るのが遅く、朝寝ぼけ眼で車の中でテレビやＤＶＤを観ていると、脳は不覚醒状態であり、生活リズムも崩れてしまう。
・布おむつから紙おむつが主流となった。
その後、さらに進むメディア社会。このような時代の背景のなかで、保護者自身のメディア漬けや乳幼児のメディア接触・愛着形成不全・外遊び、仲間遊びの衰退が浮き彫りになってきている。三間といわれる時間・空間の短縮・縮小、そして、手間がメディアにより奪われた。これは、すなわち大人社会の歪みである。体験をうばった社会が悪いのではないか。

☆子ども達がおかしい
・視線があわない子・・・その背景には母との授乳風景がある。授乳はコミュニケーションであり、おっぱいを休み休み飲むことが、母と目が合うことを喜びと感じる人間への道である。しかし、授乳中にテレビがついていたり、眼はスマホの母が多く、～しながらの危険性に気付いていない。
・落ち着きがない子・・・いつも多量の刺激を受けているので、静かだと落ち着かない。朝の保育で脳に血流を！朝、人に会い、物に触れ、安心出来る場所、匂い、肌の触れ合いで子どもは安心し、その子の最大の力を発揮する。保育者はそのために安心できる存在であること。緊張したり、やらせる、叱ることで子どもの力が発揮される訳ではない。
・話を聞けない子・・・スマホ片手に子どもと一緒にいる母。静かに遊んでいれば何も言わないが、動くと、ダメ！そっち行かない！と言う。ここに共感はない。いつもダメ！では子どもも聞きたくない。早く、ダメ！ではなく肯定的な言い方を工夫してみよう。
・発語が遅い子・・・育児語は、少し高めの声でゆっくりにすると耳を傾ける。他は聞き流していて、テレビは早すぎて頭に入っていかない。狂言の言い方は、１歳児も反応している。
・手を繋がない子・・・五感の味覚（舌）、嗅覚（鼻）、視覚（眼）、聴覚（耳）、はキャッチするが、触覚（全身）は、全身防衛である。自分の命を守るための機能だが、体験により、人との関わりで心地よく触られる安心を知り、身をゆだね、すりより、もたれかかれるようになる。

☆メディア依存
自制出来ずに、メディアの低年齢化が進んでいる。
スマホが与える脳の破壊は、薬物なみである。それを踏まえたうえで、子どもが欲しいと言った時には、よく家庭で話合い、コミュニケーションを取り、無くても代替え策を自分で出せるようにする事が大切である。

【講演を通して明確になったことや課題】
時代の流れと共に、豊かになることが大切なものを実は奪ってしまっていたことに気付かせていただいた。私たち、親もメディアの危険性を知らずに触れていることが日常になってしまっている。
乳幼児にとっても悪影響を与えていることを念頭におきながら、保護者支援をし、愛着関係を築くことの大切さを伝えていきたい。

【講師からの提言】
この２０年でスマホが普及し、子どもにどれだけ影響を与えているのか。０歳がメディア漬けになる危険をいつも子どもと接している保育士は気づいているであろう。基本、２歳までの子どもにメディアは必要ないと考えているが、孤立した子育ての中にいる母親にとってメディアがないと家事がすすまない現状も見受けられる。保育士は専門家として、何が問題なのか？なぜ？そして何が大切？をおさえていってほしい。
障害が疑われるお子さんには、メディアをしているか確認し、メディアをやめてみる提案をし、関係性の回復を促す遊びを紹介してみてはどうか。

【参加者からの声】
メディアについての伝え方やママ達がいつもスマホを持っている危険性を感じた。
Ｑ：　母達にどう知らせたら良いか？
Ａ：直接言うと母はやめられない自分を責めてしまうので、上から目線でなく関係性をこわさないように資料等を上手く使って知らせ、どう向き合い使っていくか一緒に考えていくと良い。

ランチライブ

12：00〜12：30　活動室３　「まあせんせいと遊ぼ！」
学校法人袋山学園 認定こども園 しらこばと幼稚園 理事長・園長　菊地政隆氏

【午後 13：00〜15：00】

分科会５

日時：平成 30 年 12 月 4 日（火）　活動室１・２
演題：読む力が未来をひらく
講師：岡山子どもの本の会代表　ノートルダム清心女子大学名誉教授　脇明子氏
進行：髙田佐知子（奈良保育園）　記録：長田美鈴（日本女子大）
タイムキーパー：玉川晴美（第三なでしこ保育園）　機材：木村和孝（ふらっと保育園）

◎書き言葉
・人間は言葉、文字によって伝承することが可能である
→スマートフォンの普及により、文字伝達だけでなく画像によっても伝達が可能となった
→現代人の (書き) 言葉の力が急激に低下している
・書き言葉は話し言葉を文字化したものではない
話し言葉は身振り手振りやその場の暗黙の了解で伝達が可能、伝達の相違を即座に修正ができる
・文字なしの文化では抽象概念が存在しない (ex. 平和、愛)
・和紙に筆で書く文化の日本
世界最古の大長編作『源氏物語』と日本の文化は密接に関係している
・文字が読めても本が読めない
本を読むとは：大学生の本離れを危惧し、著書が生まれた。
内容・メッセージが分かればいい、楽しむだけなら画像や映像でいい

◎本を読むには様々な力が必要
「よくできた物語」を読むことが
①　思考力、記憶力、想像力を育てる
②　自己認識力、自己コントロール力が育つ
→主人公の内側に入って共感でき、読者の目から保護者のような目線で主人公を見たりすることができるようになる
③　書き言葉の力が育つ
→作文を書くための良いお手本が物語の中にある
「こう書くと面白いのか！」の気づき
メディア時代になったからこそ、読書がますます大切なものになった
→実体験から学ぶことの重要性、時代の変化に対応する力

◎子どもの本離れ、生きる力を育てる読書
就学前の子どもたちのために、電子メディアにのめり込ませないこと
絵本を読む際、「〇〇くん / ちゃん、この本喜びそう」と、一人ひとりのために選ぶ
昔話絵本を読むだけでなく、昔話集から言葉だけで聞く昔話を選ぶ
(★お勧め『ロシアの昔話』福音館、『エーミルはいたずらっ子』)
表紙、挿絵などの物の美しさを見せる
大人が読書を楽しんでいる姿を見せる

◎電子メディアがいかに子どもたちを脅かしているか
幼児期は人間としての基本レベルが育つ
テレビが面白いからではなく、音が出る・動くものに恐怖を感じているから集中してみている
子ども時代は時間の流れが大人よりも長く感じる、スローモーションでみているから
→密度の濃い体験をさせる
ゲームは五感すべてを使うことができない
大人が使う言葉とふれあいの表情、振る舞いを見て子どもが育つ
↔映像からの情報では断片的で役に立たない
人間は特別な体験をしたときに高揚感を感じる
アルコール、ドラッグ、刺激的な映像鑑賞は依存性を進行させやすい
→ワクワクできなくなる→現実生活の居心地が悪くなる→アルコールやドラッグに依存し癒しを求める　という悪循環に陥る
昔の子どもはやんちゃ坊主→中学生以降しっかりする
現代の子どもは思春期時代手がかからない→いつ爆発するかわからない

◎メディアにむしばまれる子どもたちを守るには
人と関わることの喜びを味わわせる
五感を全開にできる体験をさせる

◎昔話
繰り返しが多いため簡単に絵本にできない
恐ろしいこと、残酷なものを絵にしにくい
挿絵に適したものを利用する

〈参加者の意見交換〉14:45 ～ 14:50
・子どもにはいいものを与えたい、美しいものを見せたい
・参考図書を選んでいきたい
・メディアが及ぼす危機感を保護者にどう伝えていくのか
・絵本の読み聞かせをどう行っていくのか探っていきたい

〈参加者からの質問〉
Q. いい本の判断基準とは（南部子育て支援センター八代氏）
A. 素晴らしいと思える絵本の蓄積が個人の中にあることが重要
大人同士で絵本を楽しく読みあい議論する
一生懸命「絵を読む」とわかってくる
いいと思っていたけれど、繰り返し読むとそうでもないなという経験をする
絵の隅々が何を物語っているのかを理解する

【午後 13：00〜15：00】

分科会６

日時：平成 30 年 12 月４日（火）　多目的室Ａ
演題：保育指針に見る保育の未来〜改定の背景とその概要をふまえて〜
講師：秋草学園短期大学　准教授　浅井拓久也氏
進行：茂木孝子（ほしのみや保育園）　記録：藤田恵美（甲府市岩崎保育園）
タイムキーパー：玉川晴美（第三なでしこ保育園）　機材：木村和孝（ふらっと保育園）

保育所保育指針が変わったが、どう変わったか。ポイントは、小学校と保育所の連携の強化にある。小学校の先生が保育所の要録を読み取れないと、子どもの育ちに反映されない。小学校の先生にとって保育所の先生が、何をしているのかを分かるように、小学校を意識した改訂である。

○指針改定の背景
・子育てを取り巻く社会の変化
保育園は、以前は貧しい人が入るところだったのが、平成 29 年度には、1,2 歳児は、45.7%利用している。また、働く女性が増え、共働きが増えたため 012 歳児のニーズが高まっている。そのため今までの３歳以上児の保育指針だったのを、012 歳児の保育指針の部分を大幅に増やした。また、３歳以上児のほとんどが幼稚園か保育園に入所している。幼稚園、保育園、認定こども園の３歳以上児の教育を幼児教育として共通にした。　そのため１０の姿を取り入れ、縦の関係の小学校と保育園、横の関係の保育園同士においても分かりやすくした。
　・子ども・子育て支援新制度の開始
地域型保育である、小規模保育、家庭的保育、ベビーシッター、企業内保育（012 歳児限定）も、３歳になったら地域の保育園に来る。そのためにその施設においても保育原則、保育内容を分かるようにした。
・乳幼児に関する調査・研究の発展
言葉の力、数字の力、人間関係、感情制御（自分をコントロールする力）は、4 歳までに形成されるので、幼少期のかかわりが非常に大切、大事である。
ヘックマンの研究…貧しい家庭に生まれてもより良い幼児教育をすれば良い人生が送れる。保育の質で良く育つ、家庭環境だけのせいにできないことが証明された。非認知能力、幼児教育で大切なことは、面白い、楽しい、やってみたいという気持ちを育むこと、内面的なことを育てるが大事である。出来る、出来ないではなく、そのことに気持ちが入っているか興味や関心があるか大切である。

○構成の見直し
今回、発達に関する指針の記述がなくなった。養護と教育の書いてある場所が違う。養護に関する基本的事項が、第１章　総則に書かれている。０１２歳が増えてくるため教育より養護が大切になる。

○各章の要点
第１章　幼児教育の資質能力３つの柱
・日々の保育の中で何を育んでいるかが、３つの柱で、小学校の学習指導要領の言葉を使って表した。
・３つの柱、能力を具体化したのが 10 の姿である。

第２章　保育の内容

・基本的信頼感の形成、保育の原点、愛着形成を大切にすること。泣いているときに放っておくと、無力感を感じる。自分は愛されている。自己肯定感があることによって、折り合いを付けたり、調整をしたり、我慢することが出きる。

・学びの芽生え　子ども自身が必要と思ってやっていることが大切

・保育の内容の記載のありかた、基本的事項、ねらい、内容、内容の取扱いについては監査の対象になるため配慮する必要がある

・0 歳児に関しては、5 領域は使わず、3 つの視点を使う。それは、0 歳児向けに 5 領域を 3 つの視点にまとめたものである。

第３章　健康及び安全

文中に睡眠中、プール・水遊び中、食事中と 3 つの言葉が明記されたのは、子どもが死亡する事例で、特に集中して保育することが大切。

第４章　子育て支援

・保護者以外にも支援が必要になったことから「保護者に対する支援」から「子育て支援」へ

第５章　　職員の資質向上

自己研鑽が消えた。園全体、組織的にレベルを上げていくことが大切。そうなると園を率いる園長先生の資質の向上が大切になる。

【講演を通して明確になったことや課題】

・社会環境の変化によって 012 歳児の保育が増え、012 歳児の保育指針の大幅に増えた。

・五領域では、小学校の先生に理解してもらえなかったので 10 の姿を取り入れた。10 の姿は、達成目標ではない。成績表のように使ってはいけない。評価の観点で使うとは、10 の姿の視点から自分の保育を見直してみることが大切である。

・非認知能力は、心情、意欲、態度と同じで、無意識のうちに保育に取り入れているが、非認知能力と言葉が変わることにより意識して、自覚することにより質の向上に努めることが出来る。

・家庭環境も大切だが、より良い保育、質の良い保育により、より良い人間性が育まれる。

【講師からの提言】

保育所保育指針が、どう変わったか理解することで、保育指針がどう未来を見ているかが分かるようになる。低年齢で保育園に入れることにより、親自身の経験が乏しくなり、養育力が付かなくなるため、保護者対応が難しくなってくるだろう

【参加者さんからの声】

「食育について」何を活かして食育を展開させると良いか？

◎保育園の特性を活かすことが重要

・食を楽しめている子が少なくなってきているで、保育園の特性を活かす展開がよい。

・保育園の特性（保育現場では職員もいる、子どもたちがいる）

みんなでご飯を食べることができると、「みんなで食べるとおいしい」と感じることができる

園で育てた野菜を使用したことの話題をたのしむことが出来る

野菜の成長を学び、自分で育て食への関心が高まる

【午後 13：00〜15：00】

分科会７

日時：平成 30 年 12 月４日（火）　リハーサル室
演題：命をつなぐ・生活を営む力をつなぐ
講師：新渡戸文化短期大学　生活学科児童生活専攻　准教授　榊原久子氏
進行：黒須恵子（NPO 法人子育てネットくまがや）　記録：藤沢弘枝（なでしこ保育園）
タイムキーパー：森　康代（立正ベアリス）　機材：板橋秀憲（てんじん保育園）

◎子育て支援は親支援ではあるが、何の為に親を支えるのか？⇒子どもの最善の利益の保障である
　　この視点から、もう一度子育て支援をとらえ直す
●ランセットにて論文発表（世界各国の経済学者・生物学者ら）
胎児期〜乳児期（０〜３歳）のケアにコストを掛けることが、よりよい社会を作ることに繋がる
大事な０〜３歳の時期に子どもをより健やかに育てるには、何が必要か？
　①保健・医療・・・・・・事故・怪我・感染症に関する知識の獲得
　　発育・発達の保障
　②就学前教育の充足・・・五領域／１０の姿
　③安心・安全の確保・・・家族・母子・子どもを孤立化させない、虐待を予防していく
　④応答性の高い関わり・・愛着形成の確立
　⑤適切な栄養バランス・・食に関わる発達支援
　　咀嚼・嚥下・手掴み食べ等摂食機能の発達へのサポート
なぜ３歳までの育ちが大事なのか？
　　脳は３歳までに約８０％が完成する
　　心も３歳までに基盤が出来上がる
　　３歳までの時期はまさに触れるもの見るもの全てを吸収していく
　　３歳までに作られた脳が、その後の人生の基盤となる
●日常生活の環境構成⇒五感を刺激しないと、脳は発達しない
　視覚・・生まれてすぐの乳児に一番影響がある感覚
　　母が日常的に手放せないスマートフォン／視覚刺激が非常に強い⇒０歳児には早すぎる
　聴覚・・胎児（９ｗ）の頃より発達し始めている⇒生まれた時には８０％完成している
　嗅覚・・一般的な臭いに対しては、生後約１ヵ月期には成人と同等
　視覚・・新生児期では視力 0.03 程　人の表情を読む能力は生後６か月頃が発達のピーク
　触覚・・胎児期在胎９ｗから発達を始める
　味覚・・本能的に甘いものを好む　苦みの感度は大人の２倍
●心の発達と脳の発達は密接である
　胎児期後期〜母の声掛け⇒胎児の心地よさ⇒肉体の絆に繋がるといわれる
　生後２〜６か月期：大人からの語りかけが適切な聴覚刺激になり、言語取得に必要な脳が発達
　　する。人の笑顔に敏感に反応する部分が育ち、共感力（感情を読み取る力）の基礎が出来る
　生後８ヵ月：シナプスの臨界期
　　視覚は生後急激に発達する⇒生後２か月までに視覚刺激がないと、見るという回路が育たな

いこの時期に笑顔を見る機会が少ない環境にあると、子どもの脳の発達が十分になされない可能性がある

●今後確実視される時代の移り変わり／人工知能の発達による環境の変化
①身体を使わなくなる可能性がある
②自分の頭を使って、解決していく機会が減る（悩む・考える）
③生身の他者と多様な関係を作って生きる機会が減る

●今後必要とされる資質の能力／こんな子ども達を育てていこう
①身体を動かすことが大好き、身体ぐるみで何かを解ることが大好き
②自分で考えるのが大好き、議論してよりいい考えを仲間と共に見つけることが大好き
③人と関わることが大好き、誰かの役に立つ、人の世話をすることが大好き

●４０歳以上の出産が近年上昇傾向にある
生殖医療による出産件数　平成１２年⇒平成１８年　５倍に増加
少子化が進んでいて子どもの数は減っているのに、多胎児の数は増えている
少子化が進んでいるのに、小学校の特殊支援学級も増えている
少子化が進んでいるのに、低出生体重児も増加している⇒早産率の増加 (切迫早産等)
４０歳以上の出産後⇒身体的育児困難に陥るケース増
（産後の肥立ちが悪い・更年期での体調不良・親の介護）
医療的ケア児⇒この１０年で２倍に増加（無熱性けいれん等）

●第２子以降の出産に伴う育児負担と不安の増加
第１子の親よりも、第２子以降出産の母のうつ発症率高い
子ども２人を育てるという初めての経験、パートナーから子育てベテランだと思われている
第２子のケアによる不眠、第１子の赤ちゃん返り、ワンオペ等

●働く女性にとっての地域
家は寝るために帰る場所であり、生活する場所になっていない
⇒働いている時は、地域と繋がるきっかけがないので、産後孤立化しやすい
・里帰りしても、実家を離れている間に違う人間関係が出来上がっていてその中に入りにくい
・すぐに仕事復帰するので、育休中にあえて地域に馴染もうとしない母もいる
地域に馴染もうと色々情報を手にしてもそこに知っている人がいないと新しい場所に入りにくい。
新しい場所に同行してくれる人が必要ではないか？（ホームスタート等が今後重要な役割となる）

●今後必要とされる子育て支援とは何か？
現場にいる私たちが日常生活にそくした点から考え、現場に実践を落とし込んでいくことが必要
〔卵を割る・靴の紐を結ぶ・ボタンの留外し・蛇口をひねる・つまむ・トイレでしゃがむ等〕
これらの経験は、社会が便利になった現状の日常生活では出来にくい状況になってきている

手掴み食べで経験するぐちゃぐちゃ・ぬるぬる・べとべとなどの触覚、とても大事
このような経験が少ないと初めての経験に対して感覚が過敏になり引いてしまう
発達障害でも感覚過敏でもないのに、経験が少ないことが原因で感覚過敏のような症状が出てしまう

●母達からの離乳食 (0 歳児) の悩み⇒離乳食がなかなか進まない
子ども達は遊びを通し（おもちゃ等を舐める）本能的に経験を広げようとしているのに、大人が良かれと思って（感染症の予防）その経験を止めさせてしまう
経験不足が離乳食の進みをスムーズにさせていない可能性がある
また母の中で情報が優先してしまい、子どもの発達の現状況を見られていないケースも多い
●愛着形成について
１歳半までが臨界期、１歳半までに愛着が上手く育たなかった場合でも６歳までに丁寧なケアを行うことで回復するといわれている⇒就学前までに愛着形成に失敗すると反応性愛着障害を発症する

【講演を通してわかったこれからの課題】
かなり機能が未熟な状態で生まれてくる子ども達が増えているということを知っておくこと
見て真似て経験する機会が失われているという社会の中の課題にも気付いておくこと
五感を活かす脳を育てること

【講師からの提言】
子どもの最善の利益の保障のためには、日常の中で子どもが健やかに育つこと、いろいろな経験をさせてあげること、人間本来の機能を使い自分の力で生きていく能力をつけてあげることが必要。そのために私たちが専門職としてのスキルアップをし、専門性を持って母のそばで子どもの育ちの様子を見てあげながら、その子に必要なものは何なのか知って寄り添うことが大事になってくる

【参加者からの声】
○現職歯科医より
咀嚼の話や離乳食の食べさせ方が浸透していないなど、現場で出ている問題点と共通している講話を聞くことが出来て勉強になった。今後歯科医として、子どもの健やかな成長の為には何が必要なのか、きちんと伝えられるように知識を深めていきたい
○支援センター職員より
・熱意ある先生の講演を聞き、現場での親子への接し方を見直すきっかけになった
・先生のいろいろな取り組みを自分のセンターの取り組みと重ね比べてみた
・地域の方とのつながり方を勉強したくて来たが、とても参考になった
・親子への接し方も参考になり、早速センターに持ち帰り実践していきたい
・便利な世の中に慣れてきてしまっているので、子どもの成長という視点からよく見つめ直したい

【午後 13：00〜15：00】

分科会８

日時：平成 30 年 12 月 4 日（火）　多目的室 BCD
演題：現場で生かす！０・１・２歳児の未来を育む「3 つのＴ」
講師：花園第二こども園　園長　高木早智子氏
進行：村上史子（熊本市山東こども園）　記録：天田有紀（NPO 法人子育てネットくまがや）
タイムキーパー：小澤雅子（ほしのみや保育園）　機材：木村和孝（ふらっと保育園）

子どもの言語発達において重要なのはどれだけ豊かな言語環境におかれたかということ。
親が話しかける言葉が多いほど、それは高まる。命令・禁止（ダメ・ストップ・それやめなさい）は子どもの言語能力の足をひっぱる。これは例外なくそうだということ。
まず　“3 つのＴとは何か”
☆Ｔｕｎｅ　ｉｎ　（注意とからだを子どもに向けて）
☆Ｔａｌｋ　more（子どもとたくさん話す）
☆Ｔａｋｅ　ｔｕｒｎｓ　（子どもと交互対話する）

〜Ｔｕｎｅ　ｉｎ〜　チューン　イン　保護者が子どもがしていることに注意を向けること。
大人がやらせたい活動のために注意を向けさせるのでなはく子どもが集中していることに保護者が目を向けることである。子どもの興味は次々と変わるがそれに保護者がついていき、反応を返すことである。研究結果によると子どもの発達や将来の健康や幸福は人生最初の５年間における親の反応性と結びついているのだそう。分科会１の明和先生のお話と通じるものがある。どれだけ応答したか、皮膚接触したかということ。Ｔｕｎｅ　ｉｎ　は具体的には「観察⇒解釈⇒行動」の３つのプロセス。疲れている時、忙しいときはなかなか難しいが一呼吸おいて、赤ちゃんが何を伝えようとしているのか、理解しようと努力することが大切。何を求めているのか、訴えているのか。

〜Ｔａｌｋ　more〜　子どもと話す保護者の言葉を増やすことである。
保護者が子どもに向かって言う言葉を増やす、ではない。『子どもと』であって『子どもに』でないことがポイント。具体的には、子どもや保護者がしていることを実況中継する。あれ、これなど代名詞をあまり使わずに今○○しているから○○しようね、など具体的な言葉を使うなど。

〜 Take　turn s〜　脳の発達を考えたときには最も重要。
焦らず子どもの反応を待つことがポイントである。話し始める前の子に対してはジェスチャーを解釈しながらコミュニケーションをとる。話し始めたばかりの子どもには単語が出てくるのを待つこと。親は言葉を先取りすることを我慢すること。親が子どもに問いかける質問の引き出しが重要！

★保育の現場での保育者の子どもへの言葉かけに関する研究（0 歳児：食事場面 20 分 /3 名の保育士）
・保育者によって、言葉の数のばらつきがみられた、内容やトーンの評価にもばらつきがみられた
⇒言葉かけが多い方が発達を促すというが、果たしてただ多ければいいのか？内容はどうか？
保育者Ａ：回数 255　ポジティブが 7 割以上
保育者Ｂ：回数 366　ポジティブが 4 割、ポジティブとどちらでもないが同数 3 割　合わせて 7 割
保育者Ｃ：回数 116　ポジティブが 2 割、ネガティブが 2 割近い、どちらでもないが 4 割

・子どもにとってわかりやすい（うけとりやすい）言葉がけをしていると評価されたのは保育者Ａ
・保育者Ｂ、Ｃはポジティブかネガティブかわかりにくいことがある、受け取り側によってバラける
⇒現場での受け取り相手は０歳！０歳児にとってはどういう言葉がけがいいのか？
・保育者Ｂは最も言葉数が多い、ベテラン保育士で手際よくさばいていたそう。さてそれは保育者主体では？を苦言を指す人もいる。子どもはそれで育つのだろうか…しかし現場の保育の現状は３：１言語環境が大事というのは分かったうえで、子どものうけとりやすい言葉、声掛けのものさしを作れないだろうかと研究を進めていらっしゃる最中。

★Ｔｕｎｅ　ｉｎ　の解釈をしてみよう！

　～保育士１年目の先生の０歳児の食事介助の映像 / ～介入の前後～
・介入前…3 分で 27 回の言葉がけ、あーん、もぐもぐごっくんばかり　子どもの手が伸びると食器を遠ざける
⇒3 つの介入　①言葉がけの回数を増やして②子どもが食べたい順に③子どもと視線を合わせて
・介入後…27 回→43 回、子どもの名前を呼ぶようになった、子どもが食べたいものがあることに気づいたことで○○食べる？という言葉がけが出た

★★参加者も同じ場面で解釈を体験★★

隣の人と意見を聞きあう（あえて聴く側はうんうんと頷くのみ）
・同じ意見もある、違う見方をする場合もある
⇒1. 観察　2. 解釈　3. 行動　解釈に正解はない！！人の数だけある。子どもの気持ち、相手の気持ちを想像する（ミラーリングしてメンタライズィング）、それが必要なことである。（共同注視）

【講演をとおして明確になったことや課題】
・子ども自身のイメージを大切にする　例）穴：子どもが穴を見ている時は声をかけない、ふと見上げた時に「穴、あいてるね」と。絶妙なタイミングで！
・子どもの言葉を育む環境づくりとは何か　多くの言葉がけをした方が良いことをわかったうえで保育の現場では一斉活動の場面が多い、お背中ペッタンなど一言で動かす、個々への声掛けは少ないことがある現状

【講師からの提言等】
本当の子育て支援は支援を必要じゃない状態にすること。支援者は親にしてほしい行動をすること。群れの中で子どもを育て、よそのこどもに声をかける。長時間一緒に過ごすからこそ、チューンインできる保育環境、支援拠点環境が必要である。

【参加者からの声　（質疑応答より）】
・若手への指導のコツは？⇒これやって、あれやってと言うより、できていることに目を向けて。具体的に指示をしてしまうとそれじゃなきゃダメだと思われてしまう。気持ちよく保育してもらいたい。厳しく言って良かったことはない。先生ならどうする？どうしたいの？と問うことで自分を振り返りそれが引き出しになっていく。
・今回の映像のチューンイン体験で、実際の現場でも子ども主体を大切にしようとする良いきっかけになった。

閉会式　15：30〜16：00

２日間を通し、大ホールでのセッションの切り替わりには「わらべうた」を取り入れた

閉会の挨拶
ここネット副会長　小岱柴明

大会宣言
ここネット事務局長
村上千幸

お礼の言葉
埼玉ここネット会長
剣持　浩

次回開催県へ花束贈呈

次回開催県の挨拶

特別企画

第２日目・12月４日（火）16:00 ～ 18:30

大ホール

特別先行試写会　あの日のオルガン

解 説

太平洋戦争末期、53人の園児の命を救った20代の保母たち。
日本初の疎開保育園の真実、実話の映画化。

太平洋戦争末期、米軍による本土爆撃が激化する中、日本は縁故疎開出来ない大都市の国民学校初等科3年～6年の学童を、半強制的に集団疎開させることを決めました。いわゆる学童疎開です。一方、学童に満たない園児たちの命を守るため、政府や東京都の決定を待たずに東京都品川区戸越の20代の保母たちが、53人の園児を連れて集団で疎開した「疎開保育園」の事実は、今まであまり注目をされていません。

誰もが自分の命を守るだけで精一杯だった時代。いよいよ戦局も深刻化を増し「子どもを守りたい」という一心で突き進む若き保母たち、そして子どもだけでも生き延びさせたいと願い、保母たちに幼い命を託す母、父 ―。必死で園児たちの受け入れ場所を探し、ようやく見つけたのは埼玉県平野村（現・蓮田市）の無人の荒れ寺でした。疎開生活をスタートさせた保母たちを待っていたのは、毎日湧き出る様々な問題。そんな過酷な生活の中でも保母たちと園児たちには、あたたかい笑いがあり、ひたむきに前を見ていたのですが―。

本作は、当時の保母や母親たちへのインタビューを収録した久保つぎこ著『君たちは忘れない　疎開保育園物語』(※注1)の原作をもとに描かれた、疎開保育園の真実の実話の物語です。

メガホンを取ったのは長年、山田洋次監督の共同脚本、助監督を務めた平松恵美子監督。『ひまわりと子犬の7日間』に続いて本作でも脚本を手がけ、長編劇映画2作目となります。

主演には、保母たちのリーダー・板倉楓役に戸田恵梨香、園児たちに人気の天真爛漫な保母・野々宮光枝役に大原櫻子（W主演）。更に20代の若い保母たちには、佐久間由衣、三浦透子、堀田真由、福地桃子、白石糸、奥村佳恵ら期待の若手女優たちが配されました。保母たちと園児たちの心和む見事なハーモニーは見どころのひとつです。そして、山中崇、田畑智子、陽月華、松金よね子、田中直樹ら演技派俳優、新進の萩原利久と共に、夏川結衣、林家正蔵、橋爪功ら山田洋次監督作品にも多数参加、日本を代表する俳優たちが集結いたしました。

※注1:『あの日のオルガン 疎開保育園物語』の名前で復刻版が2018年朝日新聞出版より発売

物 語

この光景、覚えておこう。
今日聞いたのは警報じゃなくて、オルガンと子供の歌声だけ ―

第二次世界大戦末期、警報が鳴っては防空壕に避難する生活が続く1944年、東京品川の戸越保育所では、保母たちが保育所の疎開を模索していた。まだ幼い園児たちを手放す不安、迫りくる空襲から子どもたちだけでも助けたい、と意見の分かれる親たちを保母たちが必死に説得する中、埼玉に受け入れ先の寺が見つかる。 荒れ寺での疎開生活をスタートした若い保母たちと幼い園児たちを待っていたのは、毎日湧き出てくる問題との戦いの日々。それでも保母たちは子どもたちと向き合い、ひたむきに励まし合いながら奮闘していた。しかし終わりの見えない戦争への怒りと空腹、24時間保育に次第に彼女たちは疲れ果てていく。そして、疎開先にもいよいよ空襲の影が迫ってくる・・・・。

監督・脚本　平松恵美子

1967年生まれ、岡山県出身。93年『学校』(山田洋次監督)に参加し、以降の山田監督作品『男はつらいよ　寅次郎紅の花』(95)、『たそがれ清兵衛』(02)、『隠し剣 鬼の爪』(04)などに助監督として参加する。また共同脚本として、『さよならクロ』(03/松岡錠司監督)、『釣りバカ日誌16』(05/朝原雄三監督)の他山田監督の『武士の一分』(06)、『母べえ』(08)、『おとうと』(10)、『東京家族』(13)、『小さいおうち』(14)、『母と暮せば』(15)、『家族はつらいよ』シリーズ(16～18)などに参加。監督作品として『ひまわりと子犬の7日間』(13)、「双葉荘の友人」(16/WOWOW)などがある。

クレジット

■キャスト

板倉　楓　・・・　戸田恵梨香
野々宮光枝　・・・　大原櫻子
神田好子　・・・　佐久間由衣
山岡正子　・・・　三浦透子
堀之内初江　・・・　堀田真由
森　静子　・・・　福地桃子
江川咲子　・・・　白石　糸
大沢とみ　・・・　奥村佳恵
近藤信次　・・・　萩原利久
大久保秀雄　・・・　山中　崇
坂本きく　・・・　田畑智子
藤木玉代　・・・　陽月　華
近藤梅子　・・・　松金よね子

藤木勝男　・・・　林家正蔵
柳井房代　・・・　夏川結衣
脇本滋　・・・　田中直樹
近藤作太郎　・・・　橋爪功

■スタッフ

企画　：　鳥居明夫
エグゼクティブプロデューサー　：　李　鳳宇
プロデューサー　：　三宅はるえ
企画　：　鳥居明夫、李　鳳宇

音楽　：　村松崇継

撮影　：　近森眞史
照明　：　宮西孝明
美術　：　小林久之
録音　：　西山　徹
編集　：　小堀由起子
装飾　：　大庭信正
衣裳　：　真柴紀子
ヘアメイク　：　細倉明日歌
VFXスーパーバイザー　:オダイッセイ
音響効果　：　勝亦さくら
スクリプター　：　小林加苗
助監督　：　相良健一
製作担当　：　雲井成和

音楽　：　村松崇継

監督・脚本　：　平松恵美子

戸田恵梨香　　大原櫻子

佐久間由衣　三浦透子　堀田真由　福地桃子　白石糸　奥村佳恵
萩原利久　山中崇　田畑智子　陽月華　松金よね子
林家正蔵　夏川結衣　田中直樹　橋爪功

監督・脚本:平松恵美子　原作:久保つぎこ「あの日のオルガン 疎開保育園物語」(朝日新聞出版)
製作:「あの日のオルガン」製作委員会　配給:松竹株式会社　助成:文化庁　©2018「あの日のオルガン」製作委員会　anohi-organ.com
120分／カラー／ヴィスタサイズ

2019 年 2月公開

協賛各社展示

【P56～57 参照】

計 40 社にものぼる企業様に、ここネットの理念・大会趣旨をご理解のもと抄録への広告掲載という形で御協力をいただきました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。また、うち 31 の企業様には会場にて展示の協力もいただき、大会を華やかに盛り上げていただきました。二日間にわたり、参加者へ保育・子育て支援に関する製品やシステムについてご説明いただいたり、抽選の参加へ促していただきました。保育環境を見直すよい機会になったという声もいただきました。

子育て横丁

【P58～59 参照】

昨年の山口大会の「子育て屋台村」を埼玉風にアレンジし、「子育て横丁」として二日間、各地の子育て情報を提供していただきました。15 団体の参加をいただき、参加者の関心を集めていました。

十人十彩な物語

この大会を交流の場として「十人と（たくさんの人と）色んな物語」を繰り広げていただきたいという想いでこの企画を続けてきましたが、今年は名前を変えて交流の仕掛けを作りました。川越の「菓子屋横丁」にちなんで、菓子屋横丁なるものも登場！全国の参加者の皆様からお菓子を差し入れていただき、皆様の温かい想いが、お菓子を通じて体に染み渡っていきました。

受付

事前に参加証を送付しておりましたので、受付では資料をお配りするのみでした。お名前チェックもなく大人数でもスムーズでした。

協賛各社展示

協賛各社展示

子育て
yama GUCCI
アラカル

子育て支援センター連絡協議会
富山県
NPO法人
彩の子ネットワーク
子育て
yama GUCCI
アラカル

子育て支援センター連絡協議会
富山県
NPO法人
彩の子ネットワーク
さいたま市
子育て情報

行田市
私たちからのメッセージ
ここが、あるよ
ここに、いるよ
特定非営利活動法人
おもちゃの図書館

行田市
足袋保育って
いいね!

千葉県
にこにこ広場
ご来県、お待ちしています!

千葉県
にこにこ広場
ご来県、お待ちしています!

私たちからのメッセージ
ここが、あるよ
ここに、いるよ
特定非営利活動法人
おもちゃの図書館

彩の子ネットワーク
さいたま市
子育て情報
私たちからのメッセージ
ここが、あるよ
ここに、いるよ

2018　埼玉宣言

大会テーマ：「伝承」～子どもたちへ手渡したい未来～

“子どもは時代の鏡”と言われます。子どもの育ちと子育てを取り巻く社会環境は、便利で快適、豊かになる一方で児童虐待や貧困などの社会的養護を必要とする家庭が増加しています。また、心身の発育不全などの子どもの育ちにも大きな影響をもたらし「社会成熟の矛盾」となって表れています。この現状に対して「子育て支援・保護者支援」及び「子どもの育ち・子育ち支援」への期待は大きく、更なる充実の必要性を感じます。

今大会は「蔵の町」川越で開催しました。日本古来の豊かな子育てを“変えてはいけないもの”として子育ての蔵でまもり「子どもへ手渡す未来」として「伝承」すべく研究討議を重ねてきました。さらに全国の子ども子育て支援者相互の交流を大切にしながら、「十人十彩な物語」をはじめ、前大会でも企画された「子育て屋台村」を「子育て横丁」に引き継ぎ、各地の子育て情報の共有と新たなつながりを進めてきました。

1. 子育てや保育をサービスにしない

生命は“つくる”“つくらない”というように「もの」として扱われるものでなく、様々な奇跡に導かれて“授かる”ものです。生命のために必要な水や空気をサービスといわないように、子育てや子どもが育つためのより良い環境づくりは、サービスではなく、全ての子どもが生きて成長するために不可欠の社会的財産との認識を共有していきたいと思います。

2. 子育ての蔵キーステーションになる

「自己と社会性の心の力」を育むために「食う・寝る・遊ぶ・つながる」という子どもの姿から、伝承されるべき子育ての知恵を大切にします。子育て支援拠点および保育園・こども園が子育ての蔵としての役割を担っていることを確認し、親から子、子から孫へと伝承する地域の子育てのキーステーションにします。

3. 保育・子育て支援の専門的価値のさらなる向上に

親を加害者にさせないために不適切な養育・虐待に気づく目を養い、「なんとなく気になる」ことが「専門的な気づき」になることを自覚して、アセスメント力を高めて保育の専門的価値をさらに向上させていきます。

以上のことを宣言します。

平成 30 年 12 月 4 日

第９回子ども・子育て支援全国研究大会参加者一同